

英文学読み直し（４）

感受性のゆくえ — Mary Hays の *Memoirs of Emma Courtney*

小 柳 康 子

はじめに

キャノン文学史の問い直しであるこの「英文学読み直し」のプロジェクトでは、過去3回にわたり、16, 17世紀のルネサンス期女性のライティングを取り上げてきた。今回は時代を150年ほど進めて、18世紀末の Mary Hays (1760-1843) の小説を読み、女性のテキストを異なる角度から検討する。

メアリー・ヘイズは、William Godwin (1756-1836), Mary Wollstonecraft (1759-97), Thomas Holcroft (1745-1809) などと共に、“English Jacobin novelists” と呼ばれる急進グループの一人で、小説家であり、友人ウルストンクラフトと同じく、フェミニスト思想家であった。また、ヘイズは良く知られているように、Gilbert Imlay との別離の後自殺を計ったウルストンクラフトとゴドウィンとを引き合わせ(1795)、ウルストンクラフトの死の報を聞いて、*Monthly Magazine* 誌上に obituary を書いた女性でもある。彼女は従来、この二人の周辺に位置する脇役として捉えられるだけだったが、二つの小説、*Memoirs of Emma Courtney* (1796), *The Victims of Prejudice* (1799) と *Appel to the Men of Great Britain in Behalf of Women* (1798) をはじめとする著作は、新しい視点から読み直される必要のある重要性を持っている。¹

ヘイズの最初の小説『エマ・コートニーの回想』は、18世紀半ばから後半にかけて急速に増えてくる、女性による女性の読者のための「感受性の

文学」 (“the novel of sensibility”) のひとつと考えてよい。² 作者ヘイズは、ヒロイン Emma Courtney の誕生から、恋愛、結婚、出産、子育てという女性の人生における重大局面をすべて織り込んだプロットによって、感じる心を強く持つ女性エマの生涯を描き、彼女の女性であるがゆえの苦難を明らかにしようとしている。

しかし、溢れ出る情熱に駆られて Augustus Harley を愛し、その思いを彼に告白するエマの恋心と失恋の苦しみを中心に展開するこの小説は、感受性の勝利をうたうものではない。手元に引き取り息子にした愛する男性の遺児、父と同じ名前を持つオーガスタスに、自分の生き方を自戒の手本とするよう望む母親の回想という設定からも明らかのように、これは感受性過多が引き起こす不幸の一代記という一種の教訓小説と読むことができるからである。本稿は、母から子供にあてた回想記という外枠的な構造と、母の失敗を子供への警告にしようとする教育書としての内容を持つこのヘイズの小説が、女性の「感受性の文学」というジャンルの中でどのような意味を持つのかを、プロットをたどりながら検討する試みである。

I

1760年に Southwark の Rational Dissenters の家庭に生まれたメアリー・ヘイズは、教育熱心な母親の影響のもとで、当時としてはまれな学問を家庭で身に付けることができた。彼女には愛しあった恋人 John Eccles がいたが、結婚式の直前の1780年、彼が突然病気で亡くなるという不幸に見舞われる。その後彼女は、Hackney の Dissenting Academy で学び、また多くのディセンターたちと文通することによって自分の思想を深めてゆくが、この中には、Robert Robinson, William Frend, George Dyer などがいた。

ヘイズは1794年10月に、*Political Justice* を読みたいが入手できないので一冊貸して欲しいという手紙をゴドウィンに書き、これを契機に彼との文

通が始まった。はじめはヘイズがゴドウィンに手紙で質問をし、彼がそれに答えるという形で、後にはヘイズの手紙での質問に、ゴドウィンが直接会って答えるという形で、親交を深め、様々な問題を議論していったといわれている。³

しかしエクルズの死によって断ち切られたヘイズの愛の対象はゴドウィンではなく、過激なパンフレットを書いた理由でケンブリッジ大学を追放されたユニティリアン、ウィリアム・フレンド (1757-1841) だった。ヘイズは自分の恋心がフレンドに顧みられないことを悩んだ末に、この思いを小説の形をとって昇華しようとする。これを打ち明けられたゴドウィンは、「自分自身をコントロールする」ことを促す手紙を書くが、ヘイズはそれにも関わらず、自分の心情を告白する小説を1796年に出版した。⁴ この少し前、彼女はフレンドに対して、自分が「自己セラピーとしてのフィクショナル・コンフェッション」を書くつもりであることを知らせている。⁵

この小説には、ヘイズとフレンドがエマとオーガスタス・ハーレイとして、またゴドウィンがエマのメンター Mr. Francis として登場し、ヘイズとゴドウィンの間の手紙はそのままエマとミスター・フランシスの手紙として利用されているが、なにより実際のヘイズの人生と重なりあうのは、エマのハーレイに対する激しい感情そのものである。そのため Janet Todd はこの小説を、「自伝とフィクションが最もスキャンダラスな形で結び付いている」⁶と、Gary Kelly は「自伝的要素を政治的批評へと一般化した……哲学的ロマンスとでもいえるものだ」と評している。⁷

ヘイズはこの作品の前書きで、フィクションが実在の人物そのままではなくあり得べき姿を描くとされる考えを否定し、エマを弱点を持つ現実の人間に近い存在として描こうとしたと述べ、さらに感受性の結果生じた過ちとそれに基づいた生き方を、一つの「事例」(“an example”) としてではなく、「警鐘」(“a warning”) として考えて欲しいと語っている。

It has commonly been the business of fiction to portray characters, not as they really exist, but, as, we are told, they ought to be—a sort of *ideal perfection*, in which nature and passion are melted away, and jarring attributes wonderfully combined. In delineating the character of Emma Courtney, I had not in view these fantastic models: I mean to represent her, as a human being, loving virtue while enslaved by passion, liable to the mistakes and weaknesses of our fragile nature. . . . yet, let them bear in mind, that the errors of my heroine were the offspring of sensibility; and that the result of her hazardous experiment is calculated to operate as a *warning*, rather than as an example. (I, 7-8)

この前書きに示されている、小説の教育的役割の強調は、語り手エマから息子にあてた手紙に見られる視点と同じもので、ここからも、ヘイズと主人公エマとの重なりがはっきりとうかがわれる。多分成人していると思われる息子オーガスタスの中に、自分の過去の過ちへと発展してゆくかすかな兆しを見たエマは、彼に生い立ちの秘密を知らせ、彼女の悔恨に満ちた人生を語る決心をする。彼の父親と関った自分の人生から、哲学が与えることの出来ないレッスンを学びとるよう諭すエマの言葉は、このメモワールの内容に真実性を付与する効果を持つと共に、感受性の開放によって目ざまされたセクシュアリティが、官能性豊かなセクシュアリティの更なる追求へ向かうのではなく、母であること、つまり母性の讃歌へと変形してゆくことを示し、きわめて興味深い。

A mystery has hitherto hung over your birth. The victim of my own ardent passions, and the errors of one whose memory will ever be dear to me, I prepare to withdraw the veil—a veil, spread by an

importunate, but, I fear, a mistaken tenderness. Learn, then, from the incidents of my life, entangled with those of his to whom you owe your existence, a more striking and affecting lesson than abstract philosophy can ever afford. (I, 6-7)

感受性は、「生理学」(“physiology”), 「認識論」(“epistemology”), 「心理学」(“psychology”)という三つの主要コンテクストを背景に, 18世紀になって活発に議論された人間の心の働きで, 精神に関する洗練された「感情」(“sentiment/sentimental”)とは区別される「肉体的反応」(“physical sensitivity”)を意味していた。⁸これが単なる肉体的反応だけではなく「極端な多情あるいは感情表白」(“emotionalism”)をも意味するようになるプロセスには, 18世紀半ば以来顕著になる「感傷文学」(“sentimental literature”)の隆盛が関係していた。⁹この感受性は, ヘイズの小説を典型例とする女性小説では, 性的情熱としてのパッション, 性的欲望としてのセクシュアリティとほとんど同義に扱われている。Patrica Meyer Spacksの指摘を待つまでもなく,¹⁰これまで正当に扱われてこなかった女性作家の小説における感受性の研究は, 今後18世紀の女性のライティングを理論化する際に避けて通れない重要な意味をもつだろう。

II

エマの母は彼女を産むとすぐに亡くなったため, 彼女は母の妹である叔母の Melmoth 夫妻に育てられる。メルモス夫妻は愛情に満ちたカップルで, 夫人は気立てがよくやさしい女性だった。だが彼女は, 感受性過多で, 古いロマンスを好み, その考えが現実離れしたロマンティックなものとなりがちで, 結果的にエマの感受性を助長してその一生に影響を与えてしまうことになる。この影響はとりわけエマの極端な読書好きという傾向に表れ, 彼女は六才の時すでに意味も解らないまま Pope の *Homer* や Thom-

son の *Seasons* を朗読し、大きくなってからは、一週間に10～14冊の小説を読むという少女になってゆく。

My avidity for books daily increased: I subscribed to a circulating library, and frequently read, or rather devoured—little careful in the selection—from ten to fourteen novels in a week. (I, 26)

貴族文化に対する階級闘争でもあった18世紀市民階級の思想の根底には、理性の制御を加えない感情の自然状態のままの野放しは、女性の肉欲を助長し墮落に繋がるという考えがあった。この時代の最も進歩的と考えられているフェミニスト、メアリー・ウルストンクラフトの *A Vindication of the Rights of Woman* (1792) は、全編この思想に貫かれているといってもよい。¹¹ この考えはまた、ウルストンクラフトの最初の小説 *Mary, a Fiction* (1788) でも、両親に正しい教育をされずに感受性を第二の天性にしてしまう主人公 Mary の苦難の人生を通して示されている。特に、夫にかえりみられない主人公メアリーの母親 Eliza が、「肉体的放縦の最も甘美な代用品」(“most delightful substitutes for bodily dissipation”) である小説を読み漁り、感覚(“senses”)を楽しませることを語るウルストンクラフトの批判的口調は鋭い。

As she was sometimes obliged to be alone, or only with her French waiting-maid, she sent to the metropolis for all the new publications, and while she was dressing her hair, and she could turn her eyes from the glass, she ran over those most delightful substitutes for bodily dissipation, novels. I say bodily, or the animal soul, for a rational one can find no employment in polite circles. The glare of lights, the studied inelegancies of dress, and the compliments offered up at the

shrine of false beauty, are all equally addressed to the senses. (*Mary*, 6)

ウルストンクラフトのこの例からも明らかなように、男女の恋愛を描く小説は、男性より精神の働きが弱い女性の感受性を助長させる危険なものと主張され、「読書が官能世界への誘惑」¹²であるとする考えが広められてゆく。人間の平等を標榜する近代市民社会のイデオロギーが、肉体的なものを排除することによって、女性のあるべき姿をイリュージョンの中で作り上げていくと同時に、それを男女の愛をテーマにする小説の中で強調していったのは大きなパラドックスだが、ウルストンクラフトと同じ思想を持つメアリー・ヘイズのこの小説も例外ではない。

エマの父親 Mr. Courtney は、娘がメルモス夫人の影響を受けて感受性を肥大させてゆくことを心配し、エマを週一度自分の家に来させて、哲学、神学、歴史の書物を読ませるが、皮肉にも父の書齋の本の中で彼女に最も大きな影響を与えたのは、感受性の権化ともいえる Rousseau の小説 *Nouvelle Héloïse* (1761) であった。

In the course of my researches, the *Héloïse* of Rousseau fell into my hands.—Ah! with what transport, with what enthusiasm, did I peruse this dangerous, enchanting, work!—How shall I paint the sensations that were excited in my mind!—the pleasure I experienced approached the limits of pain—it was tumult—all the ardour of my character was excited. (I, 41)

この引用で明らかなように、エマはこの本から、「苦痛の限界に近いほどの喜び」を与えられるが、これは、後にオーガスタスと主人公 Saint Preux とを自分の理想の恋人として想像の中で重ねあわせ、現実には彼を熱狂的に

愛するようになることへの伏線になっている。

ルソーの小説『新エロイーズ』は、いうまでもなく、イギリスのみならず、18世紀後半のヨーロッパ文化に大きな影響を与えた書物であった。ウルストンクラフトの未完の小説 *Maria, or, the Wrongs of Woman* (1798) の中にも、精神病院に閉じこめられたヒロイン Maria が女看守 Jemima を通してこの本を Henry Darnford から貸し与えられ、これをむさぼり読み筆写し、エマと同様にまだ会ったことのないダーンフォードとサン・プルーを想像力の中で重ねあわせる場面がある。

Towards the evening, Jemima brought her Rousseau's *Héloïse*, and she sat reading with eyes and heart, till the return of her guard to extinguish the light. . . . She had read this work long since ; but now it seemed to open a new world to her—the only one worth inhabiting. . . . Feeling the disappointment more severely than she was willing to believe, she flew to Rousseau, as her only refuge from the idea of him, who might prove a friend, could she but find a way to interest him in her fate ; still the personification of Saint Preux, . . . was after this imperfect model, of which merely a glance had been caught, even to the minutiae of the coat and hat of the stranger.

(*Maria, or the Wrongs of Woman*, 70-1)

ルソーの『新エロイーズ』が、特に Julie とその家庭教師サン・プルーとの若き日の恋愛を中心とする第一部が女性作家に大きな影響を与えたのは、ジュリのサン・プルーへの恋愛感情が、女性の感受性とセクシュアリティの開放への可能性を感じさせたからであった。しかしウルストンクラフトとヘイズの小説では、この感受性過多は、女性を幸福に導くより後悔と不幸を呼び込むものとしての意味を担わされることになる。ジャネッ

トッドは、これを、ウルストンクラフトやヘイズをはじめとする女性作家の感受性を基にした subjectivity のディスコースが、「自己破滅的な袋小路に入り込む」危険性を有するという指摘によって言い表している。トッドは、1) 女性作家たちが、性的、政治的、社会的闘争を同じ地平で扱うため、2) 「セックスがロマン主義芸術のそれとは異なり、知的または超越的経験とならずに、……妊娠と汚名」に墮すること根拠を求めている。¹³ 筆者はトッドが女性作家のディスコースの特徴としてあげるこれらの現象が妥当性を持つと考えるが、この議論の暗黙の前提となっている、いわゆるロマン主義的な高邁な経験を語る文学を普遍とする無意識のヒエラルキーには組みしなない。性的な戦いと政治的戦いを切り離さずに提示し、その結果としての妊娠と汚名を問題化する女性作家のこのようなディスコースにこそ重要性を見出し、それを時代の啓蒙思想の抱える問題として説明してゆくことが必要と考えるからである。

女性作家のディスコースの特徴を示す、性的なもの和社会的なものが一体となった感受性の横溢は、『エマ・コートニーの回想』では中心的な位置を占めてはいないが、叔母と父の死後、自立して生きてゆく力を持たない無力感と憤りに襲われたエマが発する次の言葉はこの例と考えられる。

Cruel prejudices!—I exclaimed—hapless woman! Why was I not educated for commerce, for a profession, for labour? Why have I been rendered feeble and delicate by bodily constraint, and fastidious by artificial refinement? Why are we bound, by the habits of society, as with an adamant chain? Why do we suffer ourselves to be confined within a magic circle, without daring, by a magnanimous effort, to dissolve the barbarous spell? (I, 55)

女性は、社会の慣習によって「ダイヤモンドのように堅固な鎖」に繋が

れ、「残忍な呪文」をかけられて「魔法の輪」に閉じこめられているというこのエマの言葉は、女性を肉体的にも精神的にも束縛された存在であると自覚する苦悩の叫びである。このエマの言葉は、ウルストンクラフトの『マライア』における、「精神病院」に「生き埋めにされた」(“buried alive,” 68)ヒロインの苦境と通底しあう響きを持つ。そしてこれは明らかに、ブロンテ姉妹においてクライマックスに達する19世紀女性作家の「監禁」のメタファーの18世紀的前駆であるといえるだろう。¹⁴

III

母代わりに愛情を注いでくれた叔母メルモス夫人は、エマが18才の時に死亡し、そのすぐ後に父ミスター・コートニーも世を去る。このためエマは叔父のMorton家に厄介になり、意地の悪いモートン夫人の仕打ちに苦しめられるが、この家で、客として逗留していた二人の男性、若い医学性Mr. Montagueと中年の哲学者ミスター・フランシスと知り合う機会に恵まれる。特にエマにとって救いとなったのはミスター・フランシスの存在で、彼は、彼女の悩みを聞き、アドバイスを与えるメンターとなってくれた。すでに言及したように、このミスター・フランシスはゴドウィンモデルにしている、ヘイズとゴドウィンの間に交わされた実際の手紙が、エマとミスター・フランシスの間の手紙としてそのまま使われている。

ミスター・フランシスは物語の途中で消えてしまい、プロットそのものにそれほど大きな役割を果たしていないが、理性主義を標榜する彼の存在は、エマの感受性のありかを浮かび上がらせる効果を持っている。自分の感情がミスター・フランシスに理解されるかどうかを、“I respected his reason, but I doubted whether I could inspire him with sympathy, or make him fully comprehend my feelings.” (I, 71) と述べて危ぶみながらも、愛する対象を求めての悩みを、彼女は次のようにミスター・フランシスに書き送る。

To admire, to esteem to love, are congenial to my nature—I am unhappy, because these affections are not called in to exercise. . . . I would catch the glorious enthusiasm, and rise from created to uncreated excellence. . . . I would feel, again, the value of existence, the worth of rectitude, the certainty of truth, the blessing of hope! Ah! tell me not—that the gay expectations of youth have been the meteors of fancy, the visions of a romantic and distempered imagination. If I must not live to realize them, I would not live at all.” (I, 88-9)

これと同じエマの思いは、第二部における手紙に、“Woe be more especially, to those who, possessing the dangerous gifts of fancy and feeling, find it as difficult to discover a substitute for the object as for the sentiment!” (II, 109) という言葉によって表現されている。エマ(ヘイズ)の、「誰かを愛していないと不幸と感じる」、裏返していえば、「誰かを愛していることによって幸福と感じる」心のありようは、ミスター・フランシスによって、当然、現実と根差さない空想の産物であるとして排斥されるものである。彼は「空想が作り出す幻影を入り込ませないように常に怠りなく見張りせよ」(“be vigilant, be active, beware of the illusions of fancy!” I, 96) と戒める手紙をエマに送る。ミスター・フランシスに代表される理性と、エマの体現する感受性のコントラストは、プロットの上では、ミスター・コートニーとメルモス夫人の、またオーガスティン・ハーレイとエマの対照ともなって、男性と女性を区分するものとして捉えられている。これは、感受性がジェンダー化されているということであるが、ここでは、この問題が今後18世紀の女性作家の小説を全体的に考察する際の一つの核をなすものであることを指摘しておくにとどめたい。

IV

モートン夫妻の娘 Ann によって近所の Mrs. Harley に紹介されたエマは、夫人のもとをしばしば訪れるようになる。彼女は、商人だった夫が財産を無くして死んでしまった後、一人暮らしをしている未亡人である。長男オーガス・ハーレイは、わずかに残された相続財産を売り払って、それを二人の弟と三人の妹で平等に分けあい、母の住む田舎とロンドンを行き来しながら、自由な生活を送っている。彼は遠い親戚の男から、「独身でいる」という条件のもとで年間400ポンドの遺産を譲り受けていた。オーガスは、エマを娘のようにもてなしてくれるミス・ハーレイの自慢の息子だった。

ミス・ハーレイ訪問の初日、エマは書齋にかかっているオーガスの肖像画を見た瞬間、まだあったことのないこの男性を恋してしまう。これこそエマの人生が周到に準備し待ち構えていた感受性の罠だったが、彼女がこの意味に気付くのはずっと後になってからのことであった。

There was a portrait of him. . . . hung up in the library. . . . I accustomed myself to gaze on this resemblance of a man, in whose character I felt so lively an interest, till, I fancied, I read in the features all the qualities imputed to the original by a tender and partial parent. Cut off from the society of mankind, and unable to expound my sensations, all the strong affections of my soul seemed concentrated to a single point. Without being conscious of it myself, my grateful love for Mrs. Harley had, already, by a transition easy to be traced by a philosophic mind, transferred itself to her son. He was the St. Preux, . . . of my sleeping and waking reveries. (I, 112-3)

後になってエマは、現実のオーガスタスにあう前の自分自身のこの恋心を、“It was in vain I attempted to combat this illusion ; my reason was but an auxiliary to my passion, . . . imagination lent her aid, and an importunate sensibility . . . completed the seduction.” (I, 116) と回想しているが、これは、情熱と想像力との結び付きによる感受性が理性を押しえて勝利を占めたという自己認識の言葉である。理性はこの幻影を前にしては、なんら力を持ちえない。愛する対象を一身に求めていたエマは、オーガスタスの肖像に理想の恋人のイメージを重ねあわせ、彼に出会う前に彼を激しく愛してしまうのである。経済的自立の手段を持てなかった女性が、読書によって官能を刺激され、理性による判断力を奪われて、自らの感情の促しに従って生きることへの危険性を、エマのこの自己認識によってヘイズは示しているといってもよいだろう。

フィクションとして始まったエマの恋は、その後オーガスタスと実際に出会うことによって対象を持つ愛へと変化してゆき、彼女はますます激しくオーガスタスへの思いを募らせてゆく。そして彼女はとうとう彼にその思いを手紙によって告白する。

“You are the only man in the world, to whom I could venture to confide sentiments, that to many would be inconceivable ; . . . I frankly avow, while my cheeks glow with the blushes of modesty, not of shame, that your virtues and accomplishments have excited in my bosom an affection, as pure as the motives which gave it birth, and as animated as it is pure. . . . Remember, that you have once been beloved, for yourself alone, by one, who, in contributing to the comfort of your life, would have found the happiness of her own. . . . I recollect you once told me ‘It was our duty to make our reason conquer the sensibility of our heart.’ Yet, why? Is, then, apathy the

perfection of our nature—and is not that nature refined and harmonized by the gentle and social affections? The Being who gave to the mind its reason, gave also to the heart its sensibility. (I, 156-61)

この手紙による直接的な告白は，“why should I hesitate to inform him of my affection—why do I blush and tremble at the mere idea? . . . It is a pernicious system of morals, which teaches us that hypocrisy can be virtue!” (I, 155) という自問自答の後に続くもので、「偽善が徳であることを教える有害な道德システム」によって、女性を貞淑で受動的な存在に留めておこうとする時代のイデオロギーに異をとねえるヘイズの姿勢が反映されたものとなっている。だがこのエマの積極的な思いに対して、オーガスは態度を曖昧にし続け、本心を明かさない。彼の心が掴めない苛立ちを前にして、エマは次のように、彼に対する自分の感情を整理し、彼への肉体の提供を論理化する。

The mind must have an object : . . . I feel, that I am neither a philosopher, nor a heroine—but a *woman, to whom education has given a sexual character*. . . I have laboured to improve myself, that I might be worthy of the situation I have chosen. I would unite myself to a man of worth—I would have our mingled virtues and talents perpetuated in our offspring—I would experience those sweet sensations, of which nature has formed my heart so exquisitely susceptible. My ardent sensibilities incite me to love—to seek to inspire sympathy—to be beloved! My heart obstinately refuses to renounce the man, to whose mind my own seem akin! (II, 52-4)

このように自らのセクシュアリティを見据えたエマは、愛の告白から更

に進んだ「友よ、あなたに私を与えます。」という手紙を書くのである。

“This is the critical moment, upon which hangs a long chain of events—This moment may decide your future destiny and mine—it may, even, affect that of unborn myriads! My spirit is pervaded with these important ideas—my heart flutters—I breathe with difficulty—*My friend—I would give myself to you*—the gift is not worthless. Pause a moment, ere you rudely throw from you an affection so tried, so respectable, so worthy of you! . . . Do not prepare for yourself future remorse—when lost, you may recollect my worth, and my affection, and remember them with regret—” (II, 68-9)

オーガスタスへの愛の自己確認、告白、自分自身のすべてを投げ出す決意を知らせる最後通告へというエマの変化は、1) 小説のクライマックスであり、プロットの中核をなす、2) 感受性の過剰という形をとった女性自身のセクシュアリティの直接描写である、という二重の意味において重要性を持っている。これは、ウルストンクラフトの『マライア』の主人公のマライアがダウンフォードへの愛を自覚する次の場面と同じく、自分自身の、そしてまた、女性一般の中に存在するセクシュアリティの自覚とその言語化にほかならない。

When novelists or moralists praise as a virtue, a woman's coldness of constitution, and want of passion; and make her yield to the ardour of her lover out of sheer compassion, or to promote a frigid plan of future comfort, I am disgusted. They may be good women, in the ordinary acceptation of the phrase, and do not harm; but they appear to me not to have those “finely fashioned nerves,” which render the

senses exquisite. They may possess tenderness ; but they want that fire of the imagination, which produced active sensibility, and positive virtue. (*Maria*, 114)

マライアは、感覚を研ぎ澄まされたものにする、女性の肉体的欲望としてのセクシュアリティの欠如、あるいは欠如を装う偽善を激しく糾弾し、「燃えさかるイマジネーションが能動的な感受性と肯定的なヴァーチャー」を生み出し、いわゆる「情熱の欠如」、「肉体の無感覚」がヴァーチャーではないと明言している。マライアの否定するこの括弧つきのヴァーチャーは、もちろん、当時一般に考えられていた女性の肉体的貞節であり、行動における道徳的淑徳とみなしてよい。マライアは、肉体的な感覚に基礎を置くセクシュアリティ、女性を社会的くびきから開放するものとしてのセクシュアリティをここで賞揚している。自分自身の女性というアイデンティティを認識して、「自然によって見事に感じやすく造られた心によって、あの素晴らしい感覚を味わいたい」と告白するエマも、この「素晴らしい感覚」(“sweet sensations”)が何を意味するのかを知っていた。メアリー・ウルストンクラフトとメアリー・ヘイズという18世紀フェミニストによる小説の主人公は、ヴァーチャーという言葉の読み直し、あるいは、意味の転換をここで大胆に行っているということである。だがこれは、本稿の「はじめに」で言及したとおり、ウルストンクラフトとヘイズが完全に信じていたことではなかった。夫を持つ身でありながらダーンフォードと肉体関係を結ぶが最後には裏切られるマライアと、¹⁵自分の愛が感受性の罠にはまった誤りに基づくものであったことを知らされるエマの描かれかたによってもこれは示されている。それは、貴族階級との戦いを目的とした中産階級女性の啓蒙主義的・革命的フェミニズムの問題性に繋がるものであると言い換えることもできるだろう。

V

エマの文字通り人生を賭けた告白は、オーガスタスの曖昧な態度でかわされ続け、彼女は自分の思いを彼に打ち明けたという理由で責められさえする。オーガスタスの自分に対する気持ちを知りたい一身のエマと、それを知らせることをせず、かといって彼女を拒絶するのでもない彼の心理戦が延々と続けられた後、彼がすでに結婚して子供までもうけていた事実が判明する。独身であることを条件に譲られた遺産がもらえなくなることを恐れたオーガスタスは、母親にも結婚の事実を知らせていなかった。エマは当然、激しいショックを受け、オーガスタスに、“My errors have been the errors of affection . . . I perceive my extravagance, my views were equally false and romantic.” (II, 139-40) と語り、彼を諦める決意をする。エマには、結婚している男性への愛を貫くだけの勇氣はなかったのである。ここで彼女が省みる自分自身の過ちは、このメモワールを書くに至る自分の心のありようの自覚でもあり、感受性にとらわれ、セクシュアリティを賞揚した結果としての不幸の認識でもある。

オーガスタスを諦めたエマは、この後、偶然ミスター・モンタギュと再開し、一人で生きてゆくあてのない自分を顧みて、かれのプロポーズを受け入れ結婚した。心を苛む激しい情熱の代わりに、尊敬と感謝と愛情を結婚によって与えられたエマは、まもなく女の子を出産する。そしてこの新しい生命によってエマは、「純粹で、清らかで、言葉で言い表せない喜び」 (“a pure, a chaste, an ineffable pleasure,” II, 165) である愛情、すなわち、母性愛を知り、それによって今までとは異なる満足感を得ることになるのである。

I became a mother ; in performing the duties of a nurse, my affections were awakened to new and sweet emotions.—The father of my child

appeared more respectable in my eyes, became more dear to me : the engaging smiles of my little Emma repayed me for every pain and every anxiety. While I beheld my husband caress his infant, I tasted a pure, a chaste, an ineffable pleasure. (II, 164-5)

小説はしかし、ここでハッピーエンドになって終わらない。この後、ドラマチックな形でのオーガスタスとの再会と彼の死、夫モンタギュによる小間使い Rachel の誘惑と、その結果生まれた子供のモンタギュによる殺人、彼のピストル自殺、と目まぐるしく多くの出来事が続いて起こるが、エマは、それらを乗り越え、自分の娘と、父と同じ名前を持つオーガスタスの遺児、オーガスタス・ハーレイを引き取り育て上げることに母としての喜びを感じながら生きてゆく。娘は14才で亡くなるが、エマはこの悲劇にも耐えて中年にさしかかる。そして、成長した息子に自分の人生を語ることによって、生きてきた道の総決算をしながら、次の世代の息子への義務を果たそうとするのである。息子オーガスタスに語られた人生は、「誤り」続きの「苦痛に満ちた」ものであった。女性の感受性が女性を不幸にしたことが、母親のアドヴァイスという枠組みの中で回想されて小説は終わる。

My Augustus, my more than son, . . . I have unfolded the errors of my past life—I have traced them to their source—I have laid bare my mind before you, that the experiments which have been made upon it may be beneficial to yours ! It has been a painful, and a humiliating recital—the retrospection has been marked with anguish. As the enthusiasm—as the passions of my youth—have passed in review before me, long forgotten emotions have been revived in my lacerated heart . . . The frost of a premature age shed its snows upon my temples, the ravages of a sickly mind shake my tottering frame. The

morning dawns, the evening closes upon me, the seasons revolve, without hope: the sun shines, the spring returns, but, to me, it is mockery. (II, 220)

エマ・コートニーは人生の後半に至り、自分の感受性がいかなる意味を持っていたのかを悟った。愛する対象を求めてやまない心に促され愛を告白したエマの辿る運命は、セクシュアリティと同義である感受性が、男性の愛玩物ではない自立した存在へと女性を開いてゆく可能性を与えてくれると同時に、結婚という安定した場を保証しない精神の悲惨をもたらすことを象徴的に描いたものといえる。

ヘイズはこのような女性の存在のありようを救いとるために、母親エマを自らの人生を題材にして子供を訓育する教育者、管理者として設定し、この作品に感受性の小説を歴史化する視点を与えている。すでに言及したように、これは、母親賛美を前面に出して女性の優越を主張するこの時代の進歩的啓蒙主義イデオロギーのフィクション化に他ならない。なぜなら、「女をたんに、「より劣った男」ではなく、独自の価値を持つ存在として新たな両性関係のなかで規定しなおすためには、女の性的欲求を次元の低いものとして斥け、女のセクシュアリティを、母性と男性よりもすぐれた道徳性という方向で昇華させてゆくことが必要」¹⁶ だったからである。

今回は、女性の感受性に根差したセクシュアリティを母性に収斂させてゆくヘイズの構想が、「よき母という神話」に、さらには「母性ファシズム」へと繋がる可能性を持つ¹⁷という方向から論旨を組み立ててみた。18世紀の女性の小説をこのように捉えることは、当然、啓蒙主義に染め上げられた女性の権利を擁護するフェミニズムの意味を問い直すことにつながる。

しかし、このような大きな枠組みからこの小説を検討しようとする我々読者は、奇妙にも、感受性の過剰を悔やみ、それによる人生の不幸を嘆く

エマと、その裏に存在する作者ヘイズに共感するよう仕向けられる。これは、手紙と回想を中心にした一人称告白小説というテクニクに由来するのか、あるいはヘイズの思想の在り方そのものに関するのか、さらには、もっと別のところに原因があるのかは、啓蒙主義的・革命的フェミニズムの問題性ととともに、この時代の他の女性作家の小説を読み続ける中で考えてゆく必要のある問題であると思われる。

本稿は、1995年10月14日に活水女子大学で行われたイギリス・ロマン派学会第21回大会での口頭発表を、大幅に書き改めたものである。また、『津田塾大学言語文化研究所報』第10号(1995年)所収「女性のライティング研究の現在—批評・コンピュータテキストベース・Mary Wollstonecraft—」の中の Wollstonecraft 論を発展させたものでもある。

使用テキストは以下の通りである。

1. Mary Hays, *Memoirs of Emma Courtney*, 2 vols. (Oxford and New York: Woodstock Books, 1995).
2. Mary Wollstonecraft, *Mary Wollstonecraft: Mary; Maria and Mary Shelley: Matilda*. ed. Janet Todd (London: Pickering & Chatto, 1991).

Memoirs of Emma Courtney は女性作家、詩人の復刻シリーズであるウッドストック版を使用したか、これは一巻、二巻を合本した版であるため、本文中の引用には、I, II の区別を付け、その後ろに引用ページ数を示した。

Notes

1. 今後のメアリー・ヘイズの研究は、啓蒙主義的・革命的フェミニズム、急進小説、ノン・コンフォーミズムなどの側面を視野に入れて、ウルストンクラフト、Helen Maria Williams, Elizabeth Inchbald, Charlotte Smith と比較した形での、歴史的コンテクストをふまえた方向に進んでゆくと思われる。

- る。またフェミニン・ディスコースの側面からヘイズの小説を検討した Tilottam Rajan, “Autonarration and Genotext in Mary Hays’ *Memoirs of Emma Courtney*,” *Studies in Romanticism* 32 (1993), pp. 149-76 のような研究も増えてくるだろう。
2. Janet Todd は, sentimental fiction のカテゴリーに入る the novel of sensibility と the novel of sentiment のうち, 1740年代, 1750年代に書かれたフィクションを the novel of sentiment と, 1760年代, 1770年代に書かれたものを the novel of sensibility と一応わけて検討することの有効性を示している。Janet Todd, *The Sign of Angellica : Women, Writing and Fiction, 1660-1800* (New York : Columbia University Press, 1989), pp. 139-40. 1790年代のヘイズの小説も the novel of sensibility に含めて考えてよいと思われる。
 3. これらの情報は, Todd 前掲書, Gary Kelly, *Women, Writing, and Revolution 1790-1827* (Oxford : Clarendon Press, 1993) ; Virginia Blain, Patricia Clements and Isobel Grundy eds., *The Feminist Companion to Literature in English : Women Writers from the Middle Ages to the Present* (London : B. T. Batsford Ltd., 1990) に基づいている。
 4. Todd, p. 241.
 5. Kelly, p. 93.
 6. Todd, p. 237.
 7. Kelly, p. 95.
 8. Ann Jessie Van Sant, *Eighteenth-Century Sensibility and the Novel : The Senses in Social Context* (Cambridge : Cambridge University Press, 1993), p. 4.
 9. Laura Dabundo, ed., *Encyclopedia of Romanticism : Culture in Britain, 1780s-1850s* (London and New York : Routledge, 1992), p. 519.
 10. Patricia Meyer Spacks, “Oscillations of Sensibility,” *NHL* 25 (1994), pp. 505-6.
 11. ゲーリー・ケリーは *Revolutionary Feminism : The Mind and Career of Mary Wollstonecraft* (New York : St. Martin’s Press, 1992) において, ウルストンクラフトを「革命的フェミニズム」(“Revolutionary Feminism”) 思想の持ち主と定義しているが, この思想に貫かれた『女性の権利の擁護』は, ある意味では, 肉欲否定の論でもある。女性がセクシュアリティにとらわれて一人前の人間になることを妨害されていることを述べている次のような部分に, それが明らかに見て取れる。Their senses are inflamed, and

their understandings neglected, consequently they become the prey of their senses, delicately termed sensibility, and are blown about by every momentary gust of feeling. . . . Ever restless and anxious, their over exercised sensibility not only renders them uncomfortable themselves, but troublesome, to use a soft phrase, to others. All their thoughts turn on things calculated to excite emotion ; and feeling, when they should reason, their conduct is unstable, and their opinions are wavering—not the wavering produced by deliberations or progressive view, but by contradictory emotions. (Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Woman : with Strictures on Political and Moral Subjects*, ed. Carol H. Poston, Chapter IV (W. W. Norton & Company , 1988), pp. 60-1.

12. 田辺玲子「純潔の絶対主義」荻野美穂他編『性，産，家族の比較社会史：制度としての〈女〉』（東京：平凡社，1992年），p. 128.
13. Todd, pp. 234-5.
14. これについては，青山誠子『ブロンテ姉妹 女性作家たちの十九世紀』（東京：朝日新聞社，1995年）第三章「引き裂かれた心と肉体 もの思う女」（pp. 188-255）が参考になる。青山氏は，シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』の主人公ルーシーの言葉「独房監禁」^{ソリタリー・コンファインメント}を作者シャーロットの心理状態に重ねあわせて読み取り，これを，自由を求める女性の精神的拘束の象徴としている。
15. 『マライア』は，ウルストンクラフトの死により未完のまま残された。従ってその結末は書かれていないが，死後夫ゴドウィンにより編集されて出版された小説は，いくつかの結末の可能性を並べている。そのうちの 하나가，‘Divorced by her husband—Her lover unfaithful—Pregnancy—Miscarriage—Suicide.’ (*Maria*, 147) である。
16. 荻野美穂「女の解剖学」荻野美穂他編『性，産，家族の比較社会史：制度としての〈女〉』（東京：平凡社，1992年），pp. 38-9.
17. 「よき母の神話」という言葉は，Shari L. Thurer, *The Myths of Motherhood : How Culture Reinvents the Good Mother* (Boston and New York : Houghton Mifflin Company, 1994) から，「母性ファシズム」という言葉は，『ニュー・フェミニズム・レビュー』6（1995）の特集タイトル，「母性ファシズム・母なる自然の誘惑」から借用した。男性を愛する娘から，母である女性へと変わっていくエマの視点から語られる小説は，恋人オーガスタスの下に立つ娘が，息子オーガスタスの上に立つ母として，他者の言説を支配する物語と読むことも可能である。これは，どの時代においても文化的に作り

上げられてゆく「よき母の神話」が、近代国民国家の成立とともに、母性とナショナリズムとの結びつきという形でその領域を広げてゆき、他者を支配するコロニアリズムとねじれた形で結び付く過程とパラレルなものとして考えることができるかもしれない。「国家と母性」『ニュー・フェミニズム・レビュー』6 (1995) pp. 54-105 参照。

Bibliography

Primary Sources :

Hays, Mary. *Memoirs of Emma Courtney*. Oxford and New York : Woodstock Books, 1995.

Wollstonecraft, Mary. *Mary Wollstonecraft : Mary ; Maria and Mary Shelley : Matilda*. Ed. Janet Todd. London : Pickering & Chatto, 1991.

_____. *A Vindication of the Rights of Woman : With Strictures on Political and Moral Subjects*. Ed. Carol H. Poston. London and New York : W. W. Norton & Company, 1988.

Secondary Sources :

青山誠子『ブロンテ姉妹 女性作家たちの十九世紀』東京：朝日新聞社，1995年。

Curran, Stuart. "Women Readers, Women Writers." *The Cambridge Companion to British Romanticism*. Ed. Stuart Curran. Cambridge : Cambridge University Press, 1993.

Dabundo, Laura ed. *Encyclopedia of Romanticism : Culture in Britain, 1780s -1850s*. London and New York : Routledge, 1992.

Ferguson, Moira ed. *First Feminists : British Women Writers 1578-1799*. Bloomington : Indiana University Press, 1985.

イヴォンヌ・クニビレール，カトリーヌ・フーケ『母親の社会史 中世から現代まで』中嶋公子，宮本由美ほか訳 東京：築摩書房，1994年。

Kelly, Gary. *English Fiction of the Romantic Period 1789-1830*. London and New York : Longman, 1989.

_____. *Revolutionary Feminism : The Mind and Career of Mary Wollstonecraft*. New York : St. Martin's Press, 1992.

_____. *Women, Writing, and Revolution 1790-1827*. Oxford : Clarendon Press, 1993.

小柳康子「女性のライティング研究の現在—批評・コンピュータテキストベース・Mary Wollstonecraft—」『津田塾大学言語文化研究所報』10(1995) : 52-61。
『ニュー・フェミニズム・レビュー』6 (1995)。

- 荻野美穂他編『性，産，家族の比較社会史：制度としての〈女〉』東京：平凡社，1992年。
- Rajan, Tilottama. "Autonarration and Genotext in Mary Hays' *Memoirs of Emma Courtney*." *Studies in Romanticism* 32 (1993) : 149-76.
- Rousseau, Jean-Jacques. *Julie, ou La Nouvelle Héloïse* 松本勤訳『新エロイーズ 上・下』東京：白水社，1979年。
- Spacks, Patricia Meyer. "Oscillations of Sensitivity." *NLH* 25 (1994) : 505-20.
- St Clair, William. *The Godwins and The Shelleys : A Biography of a Family*. Baltimore : The Johns Hopkins University Press, 1989.
- Thurer, Shari L. *The Myths of Motherhood : How Culture Reinvents the Good Mother*. Boston and New York : Houghton Mifflin Company, 1994.
- Todd, Janet. *The Sign of Angellica : Women, Writing and Fiction, 1660-1800*. New York : Columbia University Press, 1989.
- Tomalin, Claire. *The Life and Death of Mary Wollstonecraft*. London : Penguin Books, 1977.
- Ty, Eleanor. *Unsex'd Revolutionaries : Five Women Novelists of the 1790s*. Toronto : University of Toronto Press, 1993.
- Van Sant, Ann Jessie. *Eighteenth-Century Sensibility and the Novel : The Senses in Social Context*. Cambridge : Cambridge University Press, 1993.